

※ 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。問いに字数の指定がある場合は句読点や記号も一字に数えて解答すること。

1 中学生の真次さんは農業体験学習のため、岡山で農業を営む山内さんの家を訪れた。次の【場面1】～【場面3】における会話を読んで、①～③に答えなさい。

【場面1 農場にて】

山内 それじゃあ今日は大根の収穫を手伝ってもらうね。この蒜山の涼しい気候と火山灰の土壌で育った大根をひるぜん大根というんだ。普通の

大根は冬に収穫するけど、ひるぜん大根は夏から秋にかけて収穫するんだよ。

真次 大根にもいろいろあるんですね。それにしても広い畑だなあ。山内 急がなくてもいいので、葉の根元を持って一本ずつゆっくり真上に引き抜いて収穫してください。

真次 わかりました。でもそのように抜くのはどうしてですか？

山内 葉も商品の一部だから、途中でちぎれないようにするためだよ。それから火山灰は柔らかいので、勢いをつけると大根がすぐに抜けて尻もちをついてしまうよ。

真次 なるほど。よし、気をつけてどんどん抜くぞ！

山内 丹精して育てた大根だから、大切に扱ってくださいね。

真次 タンセイ？ ええっと、……はい。よろしくお願いします！

【場面2 休憩所にて】

山内 お疲れさま。よく働いてくれたね。収穫したばかりの大根をごちそうするよ。そのまま食べてみて。

真次 うわあ、やばい！ 甘い！

山内 あれ、お口に合わなかったか。

真次 あっ、違うんです。ごめんなさい。びっくりしたんです。

【場面3 学校にて】

先生 真次さん、農業体験はどうだったかな。

2 次の文章は、中国の詩人である柳宗元とその作品について述べた解説文である。これを読んで、①～④に答えなさい。(なお設問の都合上、柳宗元の漢詩を記載している。)

二十歳の若さで公務員試験に合格し、ゆたかな才能と学識で注目されました。活気を失った政治をあらためようとして、改革運動に加わったのですが、失敗におわって、遠く湖南省の永州に流されてしまいました。永州で十年すごしたあと、さらに南の広西省にある柳州に移され、そこで四十六年の生涯を終えました。不運な一生でしたが、地方官として、まずしい民衆を救うために心をくだいたと伝えられています。

柳宗元はなによりも、すぐれた文章家として知られています。するどい批判をこめた諷刺的な散文や、美しい自然をえがきながら、にがい思いをにじませた、すぐれた散文がすくなくあります。

詩の分野でもかれは、自然の情景をえがいて、まるで絵を見るような作品を多くのこしています。そのひとつをあけてみましょう。

江雪 江雪

千山鳥飛絶 千山 鳥飛び絶え

万径人蹤滅 万径 人蹤滅す

孤舟蓑笠翁 孤舟 蓑笠の翁

独釣寒江雪 独り寒江の雪に釣す

雪ふる川面に

山やまには飛ぶ鳥のすがたもなく
村里にはゆく人のかげもとだえた

川面に一そう舟がうかんで

ふりしきる雪の中に

みのかさつけた翁がひとりつり糸をたれている

みなさんは墨だけがかかれた山水画をごぞんじでしょう。遠景にうつすらと山なみ、近景にやや濃く里の家なみ、その間にひろがる空白の中にぼつんと小さい舟と老人、それが画面の焦点になっている……。この詩からはそんな絵を想像できるでしょう。老人は塑像のように動かず、動くものといえは、ふりしきる雪ばかり。けれども雪は、はげしくふればふるほど、この世の音を消してゆきます。雪につつまれ、清められた静寂そのものの光景は、まさに

真次 初めての作業で疲れましたが、農業の大変さと面白さがわかりました。先生 それはよかったですね。無事にやり終えたということだね。真次 はい。収穫作業はきちんとできました。ただ、言葉遣いを間違えたり、山内さんの説明でわからない言葉があったのに、ごまかしたりしてしまいました。山内 Xと質問すればよかったです。先生 そうだね。分からないことを確認することで失敗も防げるし、山内さんにもっとたくさんのお話を教えてもらえたかもしれないね。これからは気をつけよう。いい体験ができたね。



① 〓の部分の真次さんの発言について説明したものと最も適当なのは、ア～エのうちではどれですか。一つ答えなさい。

- ア 相手の指示を受け入れつつ、指示の意図を理解しようとしている。
- イ 相手の希望を聞きながら、不明な点について確認しようとしている。
- ウ 相手の発言に同意しつつ、自分の希望も相手に伝えようとしている。
- エ 相手の意向に従いながら、よりよい方法を提案しようとしている。

② 「やばい」とあるが、この表現は山内さんに正しく伝わらなかった。これをわかりやすい表現に改めるとき、適当なことを五字以内で書きなさい。

③ Xについて、真次さんは先生との会話の中で反省点を述べている。【場面1】～【場面3】における会話の内容を踏まえて、Xに入れるのに適当なことを、十五字程度で書きなさい。

えがいた一幅の絵ではないでしょうか。

けれども作者はひよっとすると、ただ情景を写しただけではなくて、小舟の老人に託して、じっと苦境をたえしのぶ自分の身を語っているのかもしれない。

辺境でのくらしは、かれにたくさんの詩材をあたえてくれました。働く人びとのさまざま日常を見せてくれました。

(出典 奥平卓「中国の古典文学5 唐代の詩」)

① 〓千山鳥飛絶 万径人蹤滅 について、

- (1) この箇所を用いられている表現技法を漢字で答えなさい。
- (2) このような状態になる理由について説明した次の文の 〓に入る適当なことを、解説文から七字以内で抜き出して書きなさい。

はげしく 〓 によって世界が閉ざされているから。

② 本文中の 〓に入れるのに適当なことは、ア～エのうちではどれですか。一つ答えなさい。

- ア 空想
- イ 模写
- ウ 絵筆
- エ 文字

③ 〓「ただ情景を……しれません」と筆者が述べるのは、柳宗元の作品にどのような特徴があるからですか。解説文から一文で探し、最初の五字を抜き出して書きなさい。

④ 本文の内容について述べたものとして最も適当なのは、ア～エのうちではどれですか。一つ答えなさい。

- ア 柳宗元の「江雪」では、厳しい自然の中での人間の営みを取り上げることで、命の輝きを詠っている。
- イ 柳宗元の「江雪」では、動の世界を背景に描くことで、静寂な無の世界を引き立てている。
- ウ 柳宗元の「江雪」では、「鳥」や「人」の不在を詠うことで、小舟の老人の存在を際立たせている。
- エ 柳宗元の「江雪」では、色彩を極限まで抑えることで、時間的・空間的な広がりを感じさせている。

「航太」は、高校生が創作俳句を競う「俳句甲子園」に出場する仲間を探している。そんな時、友人の「恵一」が本に挟んでいた幼いころの写真を偶然見つけた。この場面に続く次の文章を読んで、①～⑥に答えなさい。

(四枚のうちの二枚め)

「かわいいな、お前」
そう言つてその写真を恵一に向ける。自動的に、写真の裏が航太の目に入った。『××年、五月』とメモ書きがされている。
だが、その日付のほかにも、別の、航太がよく知っている筆跡で何か書き添えられている……。

「おい」
あわてたように恵一が写真をひったくつたが、航太の目には、全部しっかりと焼きついてしまったあとだった。

手放せる船「母」は「舟」に似ている

その写真を、恵一は乱暴に机の中に放り込む。

「なあ、恵一、今の、お前の俳句だろ」

少し前の航太だったら、あれが俳句とは気づかなかつたかもしれない。だが、連日河野と義貞先生にしごかれて今ならわかる。破調だけ十七音、そして「船」は夏の季語。

今のは、俳句だ。

思いがけず、恵一の耳が赤く染まっている。

「見せるつもりはなかったんだ。誰にも。勝手にのぞくな」

航太が黙っていると、恵一はうつむいたままで言葉を続ける。

「偶然、今の写真を見つけたんだ。小学生の頃。家族のアルバムに貼つてあったんだけど、一目見た時、なんだかいやな思い出が頭の中に湧いてきて、だから自分の本の中に隠したんだよ。そうすれば誰も見えないと思って」

「いやな思い出って？ その写真の恵一、たぶん幼稚園か、下手したらもっと小さいよな？」

「それが、よく思い出せないんだ。ただ、あの舟の上でいやなことがあった、それしか覚えていない。たぶん、おれがせっかつかくつかまえた船を、親父に取り上げられて川に放り込まれたんだ」

「せっかかく獲つたのに？ どうして？」

「知らないよ、そんなこと。おふくろにそれとなく聞いたけど、何も覚えていないみたいだった」

——お父さんに確かめてはいないのか。

「小学生のおれは、この写真を自分の本の中に隠した。そのままずっと忘れていた。ついこの間偶然見つけたらそのいやな気分がまたよみがえっちゃまって、それをなんとかしたくて……」

「それで今の俳句作ったのか？」

「ああ。作ったら、おれとしてはもう整理がついたのさ。おれにとって俳句というのはそういう道具だから」

「道具？」

「こうやって句にして、気持ちをすっきりさせる道具だよ。それだけのものさ。だからもういい」

「それだけのもの、か」

航太は自分の気持ちを持って余して、そうつぶやく。『それだけ』なんて言っちゃうんだ。本当は大事にしているくせに

航太の声音に何か感じたのか、恵一が顔を上げた。

「どういうことだ？」

自分でも自分の気持ちが全部つかめていないわけではない。でもとにかく、航太は全部恵一に話してみようと思った。

「恵一、お前、すごい発想できるんだな。おれ、河野にせっつかれて俳句を作ろうとしているけどさ。いくら頑張つたって、標語みたいなものしかできないんだよ。今の写真、お前から家族で船を釣つてたんだよな。だけど、そこからどうして、『母』は『舟』に似ているなんて、全然関係ないフレーズを思いつくんだよ。おれがやつたらきつと、船が釣れたら舟が揺れたとか、そんなもんしか作れないのに」

言葉を吐き出しているうちに、航太は自分の気持ちに気づいた。これは嫉妬だ。恵一の頭がいいことはそりゃ、わかっている。でも、自分にできないことをやすやすとやってのけて、しかもその能力を「それだけのもの」で片づける。腹を立てて当たり前じゃないか。

「航太、何を怒っているんだ？」

恵一は不思議そうな顔をしているが、航太は頬をふくらませて黙り込んだ。よくよく考えてみれば、恵一に怒るのは理屈に合わない。自分がみじめになるだけだ。でも。

河野の言い分を思い出す。

——もったいない。

今なら、河野のあの言葉が身に染みてわかる。

「おい、恵一、おれたちと一緒に俳句を作れ。俳句甲子園に行くぞ」

「はあ？」

恵一があっけにとられた声を出す。「お前まで何を言い出すんだよ、河野みたいに」

「今なら河野の考えがもつともだとわかるんだよ。お前の才能、もったいない。おれたちがその才能を必要としているのに、御託を並べて拒否するなんて、ずうずうしい」

「ずうずうしいって、お前……」

「いや、言い方が悪かった。頼む、お前のその才能がほしい」

「待てよ、航太」

恵一がすわり直す。ようやく、航太が本気だということ飲み込めたようだ。

「航太が勝手に参加するのはいいさ。だが、おれを巻き込むな」

「いいじゃないか。できないことをやれって言ってるんじゃない、お前ならできるから力を貸してくれって頼んでるんだ。どうしてそこまで意固地になるんだよ」

「意固地なのはそっちだ」

恵一は指を突きつけた。「そんなにわからないなら、一度だけ説明してやる。

おれの俳句はおれだけのものだ。みんなで語り合うものじゃない。俳句甲子園、お前は知らないだろうが、おれは散々見ているんだよ。句を真ん中に置いて、ああだこうだ、作者でもない奴らが言いたいことを言い合う。それを審査員という名の俳人が点数をつける。でもな、その審査員の点数だって、時には同じ句に六点つける俳人と九点つける俳人がいるんだよ。そんな評価のどこに客観性があるって言うんだ？ あんな試合仕立ての内容に納得なんてできやしない。おれの俳句に他人が勝手な解釈をするなんて、願い下げだ」

「自分の俳句に他人が勝手な解釈をするな、か」

「今までの航太なら、そこで引き下がっていたのかもしれない。だが今は違う。

今日、体験したじゃないか。

航太にはわからなかった航太の句のよさを、仲間が見つけてくれた。

恵一には、俳句の才能がある。物知りだから、航太の知らないこともたくさん知っているだろう。でも知らないことだって、航太が気づかせてやれることだってあるのだ。

京に俳句をするように説得した時、河野が気づかせたように。

——そうだ、あの時、河野は京に何を持ちかけたんだっけ？

航太は恵一に詰め寄った。

「なら、恵一、おれと賭けをしろ」

「賭け？ どんな？」

「さっきの句に、恵一の思いもつかないような解釈をしてやる。で、その解釈もありだとお前に納得させる。それはつまり、お前の句がお前のものだけじゃないと証明することだろう？ それに成功したら、おれたちが新しい鑑賞を見つけたら、こっちの勝ちだ。おれたちの仲間になれ」

(出典 森谷明子「南風吹く」)

① 〓の部分A、Bの漢字の読みを書きなさい。

② 次の〓の部分A、Bの漢字の読みを書きなさい。

③ 次の〓の部分A、Bの漢字の読みを書きなさい。

④ 次の〓の部分A、Bの漢字の読みを書きなさい。

⑤ 次の〓の部分A、Bの漢字の読みを書きなさい。

⑥ 次の〓の部分A、Bの漢字の読みを書きなさい。

① 〓の部分A、Bの漢字の読みを書きなさい。

② 次の〓の部分A、Bの漢字の読みを書きなさい。

③ 次の〓の部分A、Bの漢字の読みを書きなさい。

④ 次の〓の部分A、Bの漢字の読みを書きなさい。

⑤ 次の〓の部分A、Bの漢字の読みを書きなさい。

⑥ 次の〓の部分A、Bの漢字の読みを書きなさい。

① 〓の部分A、Bの漢字の読みを書きなさい。

② 次の〓の部分A、Bの漢字の読みを書きなさい。

③ 次の〓の部分A、Bの漢字の読みを書きなさい。

④ 次の〓の部分A、Bの漢字の読みを書きなさい。

⑤ 次の〓の部分A、Bの漢字の読みを書きなさい。

⑥ 次の〓の部分A、Bの漢字の読みを書きなさい。

① 〓の部分A、Bの漢字の読みを書きなさい。

② 次の〓の部分A、Bの漢字の読みを書きなさい。

③ 次の〓の部分A、Bの漢字の読みを書きなさい。

④ 次の〓の部分A、Bの漢字の読みを書きなさい。

⑤ 次の〓の部分A、Bの漢字の読みを書きなさい。

⑥ 次の〓の部分A、Bの漢字の読みを書きなさい。

① 〓の部分A、Bの漢字の読みを書きなさい。

② 次の〓の部分A、Bの漢字の読みを書きなさい。

③ 次の〓の部分A、Bの漢字の読みを書きなさい。

④ 次の〓の部分A、Bの漢字の読みを書きなさい。

⑤ 次の〓の部分A、Bの漢字の読みを書きなさい。

⑥ 次の〓の部分A、Bの漢字の読みを書きなさい。

① 〓の部分A、Bの漢字の読みを書きなさい。

② 次の〓の部分A、Bの漢字の読みを書きなさい。

③ 次の〓の部分A、Bの漢字の読みを書きなさい。

④ 次の〓の部分A、Bの漢字の読みを書きなさい。

⑤ 次の〓の部分A、Bの漢字の読みを書きなさい。

本稿では、ヒトという動物の進化史を基に、現代の社会が抱えるさまざまな問題を考えてみようとしている。ヒトは発明の天才だ。《ア》例えば、遠くへ行きたい、速く移動したい、楽に物を運びたいという欲求に対しては、車輪を発明し、家畜を使うことから始まって、やがては自動車、大型船舶、飛行機などを発明するに至った。ヒトは「AがあればBが起こる」ということを、単にAとBの連合として認識するばかりでなく、「AはBの原因ではないか」という、因果関係の推論ができる。《イ》そこで、自然界の現象の観察や、自ら行うさまざまな試行錯誤の中で、「こうすればもっとよくなるだろう」という工夫を重ねていく。そこで、技術がどんどん進歩していく。

《ウ》元々は、「Xを持っているがYは持っていない、かつ、Xは手放してもよいがYを欲しいと思っている人」と、「Yは持っているがXは持っていない、かつ、Yは手放してもよいが、Xを欲しいと思っている人」とが物々交換をしていたのだろう。《エ》しかし、そんなふうにまく双方の欲望がガツツする相手に会うことは難しい。そこで、いくつかの段階を経て、どんなものでも交換することのできる、抽象的な価値を持つ「貨幣」が発明された。

交換と交易の歴史は非常に古く、何万年も前までさかのぼれるようだが、貨幣経済は進化的に言えばごく最近のことである。どんなものにも変えることができる抽象的な価値とは、とんでもない発明だと思ふ。以前、東大名誉教授の岩井克人先生と話していた時、「貨幣の発明は言語の発明に次ぐすごい発明だ」とおっしゃっていた。その時は、そこまでのことはいらないだろうと軽く考えていたのだが、最近、やはり岩井先生のおっしゃる通りではないかと思ひ始めた。

それは、貨幣というものが、確かに人間の生活を変え、世界を見る目を変え、欲望のあり方を変え、人生観を変え、結局のところ人間性を変えてきているように思うからだ。貨幣経済の真つただ中で暮らしている私たちにとって、貨幣は当たり前前の存在だが、ヒトという生物にとつて、こんなものの存在は決して当たり前前ではなかった。そして、大量の砂糖や脂肪の存在に私たちの脳も体もうまく対応できていないのと同じく、この貨幣という存在にも、実は私たちの脳はうまく対応できていないのではないだろうか？

ヒトが狩猟採集生活をしていた頃、ヒトは自分たちの手で集められる食料を食べ、自分たちの手で作れる道具や衣服を使って暮らしていた。できることは限られていたし、望めることには限度があった。まさに等身大の生活である。それ以上の世界の可能性を知らなければ、欲望にも限りがあった。「欲しい物」というのは具体的な物であり、それを手に入れる方法は限られていた。そして、ヒトはそのことを知っていた。

しかし、Xが手に入るようになると、それ自体を得たいという新たな欲望が生まれる。「金の亡者」は、何か特定の物が欲しいから貨幣を得るのではない。ともかく貨幣をためることが何にもまして大事な目的なのだ。そこには限度がない。

また、何にでも交換できる抽象的な価値は、人間関係を買うことも、幸せな気分を買うこともできる。貨幣がない時には、人間関係を築いていなければできなかったことが、個別の人間関係抜きに手に入る。逆に、貨幣なしではほとんど何もできない。

そして、今では、貨幣を手に入れることは一つの職業につくことである。一つの職場で一つの仕事をし、そのタイカに貨幣をもらう。そうすると、ヒトは、自分が独立して生きていると思う。本当は、今でも狩猟採集生活時代と同じように、みんなで共同作業をすることで生きているのだ。農家がなければお米も野菜もない。物流や商店がなければ、買うことができない。医者がいなければ病気を治せない。学校の先生がいなければ教育ができない。今でも、みんなでもに生き、生かされて暮らしているのだが、それぞれに貨幣が介在している。共同という感覚がなくなる。便利なものには必ず負の面がある。ちよつと立ち止まって考えてみた方がよい。

(出典 長谷川眞理子「時代の風」 毎日新聞 平成二十八年十月三十日)

- ① 〓の部分A、Bを漢字に直して楷書で書きなさい。
- ② 次の一文を入れるのに適当な箇所は、文章中の《ア》《イ》のうちではどれですか。一つ答えなさい。
貨幣というものが、そうやって人間が発明したものだ。
- ③ 「最近、……思い始めた」とあるが、その理由を説明した次の文の〓に入れるのに適当なことを文章から十六字で抜き出して書きなさい。
貨幣というものが、〓から。

- ④ 「ヒトという……なかった」とあるが、どういうことですか。次の文の〓に入れるのに適当なことを二十字以内で書きなさい。
貨幣は、ヒトという動物の進化史において、古くから自然にあったものではなく、〓ものだということ。
- ⑤ Xを入れるのに適当なことを、文章中から十五字で抜き出して書きなさい。

- ⑥ 「負の面」とあるが、この内容として適当でないものは、ア～エのうちではどれですか。一つ答えなさい。
ア 貨幣と引き換えに道具や衣服が簡単に手に入るようになり、ヒトの生産技術の進歩が抑制されるということ。
イ 貨幣をためること自体が何よりも重要な目的となり、ヒトの欲望に限りがなくなるとのこと。

- ウ 人間関係や気分まで貨幣で買うことができる反面、貨幣がなければほとんど何も手に入れることができないということ。
エ 仕事と仕事の間に貨幣が介在することで、ヒトは独立して生きていると思ひ、共同の感覚がなくなるとのこと。

- ⑦ この文章を国語の授業で学習した後、先生が「参考資料」を配付した。次の文章Iは「参考資料」で、文章IIはそれを読んだ三人の生徒の会話である。これらを読んで、「人間と発明について」というテーマで、あなたの考えを条件に従って百字以上百二十字以内で書きなさい。

条件

- 1 一文目には、解答欄に続くかたちで、具体例として発明品を一つ挙げる。
- 2 二文目以降に、その具体例についての説明とあなたの考えを書くこと。

文章I

より便利で、より効率的で、より安楽な生活を望む人々は欲望をどんどん膨らませている。かつては「必要は発明の母」であり、人々が必要と求めるものが先にあり、科学者や企業はそれを察知して発明に勤しむのが常であった。生活や生産からの要求が技術が追いかけていたのだ。ところが、今や「発明は必要の母」となった。人々は新たに発明されたものを見て、実は必要性があったのだと錯覚して生活に取り入れるようになったからだ。企業が提供する科学・技術に先導され、余分なものでも必要かも知れないと感じて買い込むというふうな順序が逆転したのである。むしろ、それだけではない。企業は消費者の欲望を刺激して、本来は不必要であったにもかかわらず、必要性があったかのように誤認させる手法を探るようになり、それによって売り上げを伸ばすことに成功した。

(池内了「科学と人間の不協和音」)

文章II

Aさん 長谷川さんの文章では、ヒトは貨幣を発明したけれど、それに「うまく対応できていないのではないだろうか」と疑問を投げかけられているわ。どんなに便利な発明品でも、まず負の面に気付こうとすることが大切ね。

Bさん 参考資料では、かつては「必要は発明の母」であったのが、今や「発明は必要の母」となっていると述べられている。新製品が売り出されると、必要かどうかとは無関係に、欲しくなってしまうことは、僕にも経験があるよ。

Cさん 発明品は私たちの生活だけではなく、心理にまで影響を及ぼすよ。だね。どちらの文章も、好ましくない影響があると指摘しているけれど、発明品によって、僕たちの生活や考え、感じ方がよい方向に変わり、よくなっていることもあると思う。